ガジュマルのひとりごと

沖縄アミークスインターナショナル小学校　六年
兼城　夏穂

祖父が　子供だった頃から
同じ場所に立つ大きなガジュマル

「おじいちゃんが　子供の頃
このガジュマルには
キジムナーがいるって　みん
なで話していたよ」
それは　戦がやってくる前
まだ
みんなが　幸せだったとき

「ガジュマルの声が聞こえるよ」

祖父に言われ
ガジュマルの幹に
そっと耳を当ててみる
祖父が子供の頃の
幸せな時が聞こえてくる

「サンサナーがないているよ
きよし、一緒に取りに行こう」
「まて、まて　今度の
おにはだれね」

楽しそうに走ってくる子供たち
どこまでも続く青い空
ゆっくりと流れる白い雲
うりずんの心地よい風が
そよそよと
わたしの枝をくすぐる

私の枝にとまり
さえずる小鳥たち
私の幹にとまり
ミンミンとなくたくさんのセミたち
そのセミを目あてに　やってくる
いたずら坊主たち

わたしのつくる木陰では
女の子たちが
ままごとをしている
風の音
鳥の声
子供たちの笑い声
ああ、なんて幸せな時間だろう
こんな日が、いつまでも続けばいいのに

しかし、あの日がやってきた
青い空を　たくさんの戦闘機が飛び交い
雨のように　爆弾が降ってくる
子供たちの笑い声や話し声は
泣き声　叫び声にかわり
親をさがし　泣き叫んでいる

セミ取りに来た子も
おにごっこをしていた子も
ままごとをしていた子も
みな恐怖で　逃げまどう
「戦争だ　戦争だ
みんな、逃げろ」
大人たちが叫んでいる

私の枝に止まっていた小鳥たちも　幹にと
まっていたセミたちも　いったいどこへ
行ってしまったのだろう
森に火がつき　山が燃えていく
爆風が　私の体を
激しくゆさぶる
大地の命
空の命
海の命
たくさんの命がうばわれていく
ああ　なんて恐ろしい
こんな日は　早く終われば　いいのに

あれから　六十八年
今も私は　同じ場所に立ち続ける
やけ野原から
町ができるのを見てきた
悲しみから　立ち上がるのを見てきた
人々が
またもとのように
子供たちの笑い声が聞こえる
鳥やセミの声が聞こえる
幸せな時間は戻ってきたのだろうか

私はガジュマルの木を
そっと抱きしめた
目を開くと　祖父も
ガジュマルの木を
そっと抱きしめていた
「ガジュマルはずっと見ていたんだね
幸せなときも戦争のときも・・・」
祖父が静かにうなずく

ガジュマルは私に問いかけた
「幸せな時間は戻ってきたのだろうか」と
家族がいる
夢を持てる
友達と遊べる
学ぶことができる
今　私は
当たり前のように
たくさんの幸せに囲まれている
しかし　決して忘れてはいけない
祖父たちの乗りこえてきた苦しみを
ガジュマルの見てきた悲しみを
六十八年間抱き続けている
ウチナーンチュの思いを

だから私は
また祖父と
ガジュマルのひとり言を聞きにこよう
平和の大切さを忘れないためにも
ガジュマルの願いを聞きにこよう